

知恵の人格性と一人称表現

——箴言8章12節「私は知恵」の理解——

金 井 由 嗣

第一章 序論：「知恵の人格化」の思想史的意味

「知恵の人格化」(The personification of Wisdom)の思想は、旧約聖書の知恵思想と新約聖書・初期キリスト教のキリスト論を結ぶ重要な概念の一つと見なされている。神と本質を同じくしながら父なる神自身とは区別されるペルソナとしての「神のロゴス」キリストが、人格を持った神的な「知恵」を表す章句によって説明されるのである。この主題について、近年の独立した研究としてはポナール、ウィザリントン、マーフィーによるものがあり、日本でも大島清の概括的な著述をはじめ、たびたび取り上げられてきた。また、旧約学・新約学それぞれの立場からこの主題にふれた記述も数多く存在する。

キリスト教思想史において、「人格」(person, persona)は本来キリスト論・三位一体論の文脈で使用されるようになった言葉であり、概念である。従ってこの概念を旧約聖書の理解に当てはめるのは一種のアナクロニズムであるが、キリスト教思想

史の前提として旧約聖書及びその周辺の古代ユダヤ思想を理解するためには有用な道具であるといえる。後代の概念である「人格(ペルソナ)」をもって知恵思想を解釈するのではなく、ユダヤの知恵思想における「知恵」の記述の中のあるものが後の「ペルソナ」概念を生み出す触媒の役割を果たした点に注目するのである。その際に必要なことは、知恵の人格性の根拠として新約聖書や教父らに利用された箇所が本来の文脈の中で持っていた意味は何か、またその本来の意味がいかにして後に「ペルソナ」として理解されるようになったのかをテキストそのものに基づいて跡づけることである。

「知恵の人格化」を示す箇所として引用されるテキストは、研究者の間で多く一致している。それは、「知恵」が「私」として一人称で呼びかける箇所である。しかし、一人称で語れば独立した人格といえるのか、そもそも知恵文学において一人称の語りが果たす役割は何か、知者が一人称で語ることと抽象的な「知恵」が一人称で語ることとの間に何らかの意味上の差異は見られるのか。「人格化」という言葉を使うためには、こうした点を明確にしておく必要がある。

本研究においては、「知恵」が一人称で語る「人格化」の最も基本的なテキストの一つである箴言8章をとりあげ、そこに見られる「私は知恵(あるいは「知恵である私」)」「I am Wisdom」という表現に注目し、その理解のために知恵が、あるいは知者が、強調された主語「私」と関連づけて現れる旧約中の他の箇所と

比較検討する。

厳密な歴史的理解のためには個々のテキストの成立、さらにはテキストを構成する格言が伝承された過程を考慮し、テキストの先後関係や使用された背景を考える必要があるが、キリスト教思想史研究の予備作業としては、さしあたり初期キリスト教徒にとつての正典であった旧約聖書（または七十人訳）全体を一つのテキスト世界として考えることが許されるであろう。従つて、今回の発表に当たつては個々のテキストの歴史的性格に関する議論は括弧に入れて、所与の旧約テキストにおける各部分の意味と相互関係について考察することとする。

第二章 箴言8章12節「私は知恵」の検討

箴言8章は、「知恵の人格化」の主題に関する基本的なテキストとして、ほとんどすべての研究者に共通して取り上げられている。それはこの箇所が、「私」としての知恵の語りかけ、街角での呼びかけという「人格化」の指標と見なされる特徴を備えるのに加え、神による創造のわざに先立って存在し、神の前で「楽しむ」存在として描かれている知恵の描写が、後のキリスト教神学における先在のロゴスとしてのキリスト理解につながる決定的な影響を及ぼしたからである。実際、神一人に属する創造の業において、神とともにあって何らかの役割を果たす「知恵」は、唯一神教の枠からはみ出しかねない微妙な神的存在で

ある。創造主である神自身に最も近い神的存在でありながら神とは区別され、創造の働きに参与しながらも知恵自身が創造したとは言わない、独立した主体である「知恵」は、後の三位一体論における神的ペルソナの特徴をすでに示していると解釈される。我々はこの「創造への主体的参与」を、「知恵の人格化」を示すテキストの指標と見なすべきである。「知恵」が街角で呼びかけ、あるいは道行く人に語りかけるだけでは「人格化」と呼ぶには不十分である。なぜなら、ここで言う「人格」とは近代の心理学における概念ではなく、あくまでも三位一体における神的ペルソナを指す神学上の概念だからである。神的永遠性を備えて創造に主体的に参与する知恵のイメージは、ペンションラの知恵1:1-4、24:1-22、ソロモンの知恵7:1-8、17、9:1-118にも見られ、コロサイ1:15-20など新約聖書のキリスト論に結びついていく。旧約聖書から新約聖書を経て初期キリスト教思想に至る思想の展開を跡づけることのできる、キリスト教思想史における有効な鍵概念なのである。

箴言8章における「知恵の人格化」すなわち創造への主体的参与は、12節の街角での呼びかけに続いている。この「知恵の呼びかけ」のモチーフは箴言1章、9章にも見られる。当時の格言におけるありふれた表現であったと見てよいであろう。この「街角での呼びかけ」をもって「知恵の人格化」と見なす研究も見られるが、上述の理由から、呼びかけだけで人格化と見なすことはできない。このテキストの特徴は知恵が街角で呼

びかけることにあるのではなく、知恵の「街角での呼びかけ」と「創造への関わり」が結びついたところにある。神の創造と「知恵」とを関連づける発想は、旧約聖書中に多く見られる(たとえば箴言3:19-20²⁰、ヨブ38-39章)。それ故、知恵の「人格化」とは、「街角で語りかける知恵」と「創造における神の知恵」が結びつき、神的主体として「知恵」が一人称で創造への関与について語るところに成立する概念であるといえる。

このテキストにおいて、語りかける「知恵」の主体性を端的に示す表現が、12節の「私は知恵」**אני חכמה**である。旧約聖書中に知恵が一人称で語りかける箇所は多くあるが、「私は知恵」と、主語人称代名詞の**אני**が用いられている例は他には見られない。抽象的な「知恵」が人格(独立した主体)として語る際に、知恵が「私」であることの意味は大きい。従って、知恵思想との関連において「私」という自覚的な主語を持つ意味を検討することがこのテキストの持つ思想を理解するための鍵となることが予想される。以下の章においては、旧約の他の箇所における「知恵」と「私」(特に主語人称代名詞の「私」との関係を探ることとする。

第三章 知恵との関連における「私」の否定的位置

旧約聖書において、知恵は本来神に由来する。従って、知恵を用い、あるいは人に知恵を与える主体として現れる「私」は

知恵の人格性と一人称表現(金井)

第一義的には神である。次のテキストがそのことを示している。

(出エジプト記31:6)

וְאֵת חֹכְמָתָא דְּמִסְכֵּי וְאֵת חֹכְמָתָא דְּמִסְכֵּי וְאֵת חֹכְמָתָא דְּמִסְכֵּי וְאֵת חֹכְמָתָא דְּמִסְכֵּי

わたしはダン族のアヒサマクの子オホリアブを、彼の助手にする。わたしは、心に知恵あるすべての者の心に知恵を授け、わたしがあなたに命じたものをすべて作らせる。

知恵は本来的に神に由来するものであるから、自分の知恵に誇って神をないがしろにするものは罪に定められる。次のテキストはその例である。

(イザヤ47:10)

וְלֹא חָשְׁבוּ לָאֵלֹהִים וְלֹא חָשְׁבוּ לָאֵלֹהִים וְלֹא חָשְׁבוּ לָאֵלֹהִים וְלֹא חָשְׁבוּ לָאֵלֹהִים

お前は平然と悪事をし／「見ている者はない」と言っていた。お前の知恵と知識がお前を誤らせ／お前は心に言っていた／わたしだけ／わたしのほかにはだれもない、と。

ここでは単純に、**חכמה**と**אני**とが同じ節に現れる箇所(この二箇所だけである)を例に挙げたが、知恵の主体に関する旧約聖書の基本的態度はこの二つのテキストに表されていると見ることは許されるであろう。後者のテキストにおいて非難されている「私」はバビロンである。当時の最高水準の学芸、技術を誇るバビロンの「知恵」も、知恵の源泉である神と張り合お

うとすることは許されないのである。ヨブ記においても、「わたしが」「わたしが」と自分の知見に基づいて論争する賢者たち（たとえば5:8のエリファズ）は神によって最後は退けられてしまう。旧約聖書の価値観においては、知恵の主体として「私」の知恵を示すことが許されるのは神だけなのである。

第四章 「私」としての知者と知恵

前章で見たように「知恵」の主体は神のみ、とする思想が主流の旧約聖書にあって異なった雰囲気を持つのがコーヘレトである。ここでは、1:16、2:12、7:25に見られるように「私は見た」「私は言った」「私は探り求めた」と、知恵を求める探求の主体として常に「私」が前面に出ている。8:11でも、自分が賢者であることを主張する彼の姿勢には、知恵の探求と獲得した知恵の教授に対する明確な主体の意識が認められる。明らかに、コーヘレトは自らが獲得した「知恵」の主体として自分を押し出しているのである。

このように知恵の主体として自己を提示する知恵の教師はコーヘレトだけだったのであろうか。我々は、そのように考えることはできない。詩編や箴言の随所に自分の知恵や知識を誇ることを戒める言葉が見られること自体、賢者がその知恵を「私の」知恵として語る事が普通に見られたことを示している。ヨブ記に登場する賢者たちも、舞台は東方であるとはいえず、

古代イスラエルにあって普通に見られた賢者の有様を前提しているであろう。箴言の中でも、我が子に対する父の戒めは「私の知恵に耳を傾けよ」(5:2)との言葉を伴っている。我々は旧約聖書という、特定の宗教的価値基準による取捨選択を経た文献(群)を対象にしている。経験の集積から導き出される実生活の処方という知恵本来の性質から言っても、知恵の教育の場(家庭であれ王宮その他の学校であれ)において賢者たる教師が自分の獲得した知恵を自己の名において語ることは当然あり得たであろう。

それでは、知恵の主体を第一に神とする旧約聖書の思想は、後代の付加として片づけられるべきものであろうか。神的な知恵の人格化という思想は、知恵に対する神の根元的主体性の思想からは導き出されないものであるうか。我々はここでもう一度、コーヘレトに注目する。旧約聖書の中において最も知恵に対する人間の主体性を強く押し出すかに見えるコーヘレトは、また人間の主体的知恵の限界を提示する書でもあるからである。

コーヘレトは自らの目で見、経験したことを通して他の誰にも勝る知恵を獲得した、と述べる(彼の叙述がフィクションか事実かはここでは問う必要がない)。彼は確かに、自分で獲得した知恵を自らの名において語る知恵の教師であったが、彼が獲得した知恵とは結論において、人間的な知の限界を知ることであった(7:28-29、8:16-17)。可能な限りの経験をし尽くして、

それでもすべてを知ることができない知の限界を知った彼がなおも知恵について語り得るのはなぜか。それは、探求を通して得られた知恵が、探求の主体であるコーヘレト自身からも独立した精神的実体となっていたからである。探求に関するコーヘレトの記述を詳しく調べると、探求の主体である自己がしばしば二重化されていることがわかる（たとえば16「私」と「私の心」）。彼が獲得した知恵も、二重化された主体を形成するものとして、コーヘレト自身とも区別された独立した主体性を帯びるのである。

(17<1>2:9)

כֹּה־הֵלֶט הַיְהוָה הָיָה לְקוֹלֵהוּ וְלִפְתָּחוֹתָיו

かつてエルサレムに住んだ者のだれにもまさって／わたしは大いなるものとなり、栄えたが／なお、知恵はわたしのもとにとどまっていた。

コーヘレトにおいては、探求され獲得された知恵自体の限界を通して、単なる人間の主体性を越えたところからもたらされる知恵の永遠性が示され、そこから知恵の神的起源を聞き手に認めさせる論法が見られる。彼は知恵の教師として自らが経験によって獲得した知恵を語るが、その知恵はまた人間を超えたところ、従って神のもとに起源を有する神的実在なのである。知恵の教師が語る個人的知恵もまた神に由来するものであるとの論法は箴言に顕著に見られる。「私の知恵に耳を傾けよ」という父の教え(箴言5:1)は、「人の歩む道は主の御目の前にある」

知恵の人格性と一人称表現(金井)

との勧めを結論としているのである。それ故、賢者が自らの主体性において知恵を語ることと知恵が神に由来するものだと言うことは矛盾しない。誠実な探求と神に対する恐れが結びつくことが旧約聖書における真の知恵なのであり、そのとき獲得される知恵は賢者の主体的探求と結びつきながら個人を超えたもの、神的な「もう一つの」主体として現れるのである。

第五章 結論・知恵が「私」であることの、

旧約聖書における意味

我々は知恵が「私」として語るテキストの理解を巡って、そこで用いられる用語の意味連関を旧約聖書の文脈の中で追ってきた。知恵が「私」として語る文学形式の背後には、賢者が「私」として語っていた事実を前提する必要があるが、単なる人間の主体としての「私」は旧約聖書の価値観においては、知恵の主体とはなり得ない。知恵の根元的主体である神の前には、人間的知恵は限界を露呈せざるを得ないのである。真摯な探求において、知恵はどこまでも「私」が追い求めるものでなければならぬが、神自身に起源を有する知恵の本質は、それを追究する人間の限界を突きつけ、「私の」知恵として語ることを不可能ならしめる。しかし、旧約的世界においては限界を知らされること自体が知恵の神的起源の証明となるのであって、そこから

新たに「私」として語る神的主体としての知恵が語られる事態も起こってくるのではないだろうか。知恵の人格性が「創造―被造」のカテゴリーで語られることの意味も、そこにあるものと思われる。

本研究においては、旧約聖書全般を同時に論じて、知恵思想の持つ一般的な性質から「知恵の人格化」が成立する思想的条件を考察した。思想史の課題としては、各テキストの前後関係や影響の程度を歴史的に跡づけることにより、今回の結論を批判的に検討する必要がある。今後の課題としておきたい。

注

- (1) Bonnard, P.-E. "De la Sagesse personifiée dans l'Ancien Testament à la Sagesse en personne dans le Nouveau." in Gilbert, M. ed. *La Sagesse de L'ancien Testament*. Leuven U.P., 1990.
- Murphy, R. E. "The Personification of Wisdom" in John Day et al., eds., *Wisdom in Ancient Israel*. Cambridge U.P., 1995.
- Witherington, B. III. *Jesus the Sage*. T&T Clark, 1994.
- (2) 大島清『イエス時代―「知恵」の系譜』(山本書店、1982)
- (3) 旧約関係ではJ. ブレンキンソップ『旧約の知恵と法』(左近淑・太戸基男訳、ヨルダン社、1987) 210-254頁、新約関係ではH. ケスター『新しい新約聖書概説上―へる

ニズム時代の歴史・文化・宗教』(井上大衛訳、新地書房、1989) 354-359頁に適切な概説が見られる。

- (4) 「知恵の呼びかけ」の文学形式については、エジプトの「パート(正義)の語りかけ」形式の影響が指摘されている。Bonnard pp.130-132 参照。